いつもにまして多くの投稿があり、大変読み応えがありました。

首すじも乳ぼうもさらしたよ
けど　わたしのなかの紫の鳥居　　藤ほたる（神奈川県）

愛する人にさえも不可侵な聖域がある。合成染料がなかった時代、その染色材料が希少なため高貴な色とされてきた紫は、暖色の赤と寒色の青の割合によって色味に変化が生じる複雑な色でもあります。見慣れた赤ではなく「紫の鳥居」。色そのもののもたらすイメージが、作品に奥行きを与えています。

雨とは冷たく優しく煮込む音、
我々柳は柔らかくなりたがって、　　鯨井鴉舅（千葉県）

雨の音に対する「煮込む」という感じ方が新鮮です。煮込まれ「柔らかくなりたが」る「柳」が「我々」と描かれることで、読み手の心情も自然と柳に重なります。また、文末の読点が余韻を残しています。

本物の
荒野は向こうにあるはずで
合わせ鏡で家出を試す　　折田　日々希（神奈川県）

「本物の／荒野」を求める気持ちのありようにまず心動かされ、さらに「合わせ鏡」の持つ無限性、「家出」という語の組み合わせによって、強く印象に残る一篇でした。

習いたての
定規の使い方を駆使して
赤ん坊の掌の
長さをはかる子よ　　広田　土（大阪府）

「習いたて」という新しさと「赤ん坊の掌」の取り合わせがすごくいいですね。その情景を見守る語り手のぬくもりのあるまなざし。こちらまで顔がほころんできます。

春の川へと溶けていく雪みたいな
音をさせてオーブン光る　　うずたろう（埼玉県）

「春の川へと溶けていく雪」という比喩によって、日常の場面がぱぁっとひらけた雄大な景色へと導かれていて、言葉の持つ飛躍力を味わえる作品です。

改札を出たらひらたい海ひとつ
抱き寄せるから死んでいいから　　藤ほたる（神奈川県）

「抱き寄せる」のは「ひらたい海」なのだろうか。それとも恋人だろうか。そもそも「ひらたい海」が誰か大切な人の比喩なのだろうか。「死んでいいから」は自分のことだろうか、相手への言葉だろうか。海はひらたくとも<私>の心は波立っていて、言い募る口調に切実な感情がにじみ胸を衝かれます。

鳥たちがめちゃくちゃに飛ぶ絵
の付いた別れる時だけ使う便箋　　小林奔（神奈川県）

なるほど「別れる時」には「鳥たちがめちゃくちゃに飛ぶ」ものなのかと胸にすとんと落ちました。

恋してたら刻みネギが
ぱっさぱさになってしまった　　さいう（愛知県）

「恋」と「刻みネギ」の組み合わせが意外でユーモラス。恋に惚けていたらそりゃ刻みネギも「ぱっさぱさ」になるよね、と妙な説得力もあります。

真夜中の世界に忍び込むように
静かに家の鍵をかけてる　　松下　誠一（東京都）

語り手は家の外にいて「真夜中の世界」へ冒険に出ようとしているのか、それとも家の中の閉じられた空間で「真夜中の世界」に浸ろうとしているのか。どちらにせよ「家の鍵をかけ」るという行為ひとつが「真夜中の世界」にひそやかに足を踏み入れることにつながるところに心惹かれます。

ケトルには
しずかなお湯が沈んでる
あの世の朝を汲んだみたいに　　折田　日々希（神奈川県）

「ケトル」「しずかなお湯」「沈んでる」「あの世の朝」。言葉が重ねられてゆくごとにましてゆく静けさが心に満ちてゆきます。

夜が失速していく駅で
線路際のアパートの
錆びた
雨戸を閉める音を聞いている　　まちりこ（埼玉県）

時間の流れが止まったような夜の片隅にいる語り手。「線路際のアパートの／錆びた／雨戸を閉める音」を私も確かに聞いたことがある…と深い郷愁にかられました。

かなしみに終わりがあると
知っている肺が大きく
息を吸い込む　　さいう（愛知県）

“心”ではなく「肺」という“身体”が「かなしみに終わりがあると／知っている」という捉え方が素敵です。生きるために「大きく／息を吸い込む」そのすこやかな力が明るい。

来世では蛇口がいいな
どんな傷口でも綺麗に
してあげられる　　猫谷圭希（広島県）

「来世では蛇口」が斬新です。そして「傷口」を「綺麗に／してあげられる」という理由に打たれます。

一つだけミカンに顔を書いておく　　猫谷圭希（広島県）

どうでもいいようなことなのかもしれない。でもわたしたちがこの世を生き抜くためには、こういうちょっとしたユーモアの感覚が思いのほか大切なのかもしれません。

他にも印象に残る作品がたくさんありました。
来月も楽しみにしています。